

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2024.3.28

Vol.10

12月～2月（季刊）



左奥から：山口師長、堀川看護師長、宇佐美副看護師長、出口副看護師長、河原崎看護師
右奥から：込山補佐、木村救急センター長、国土理事長、杉山病院長、佐藤看護部長、大曲副院長

1月12日、能登半島地震における被災医療機関の支援活動として、NCGM看護師が5名派遣されました

石川県・能登半島で1月1日に発生した最大震度7の地震に際して、NCGMは看護師を5名派遣しました。派遣先は能登半島の先端、今回の地震では震源に近く、特に被害の大きかった珠洲市の総合病院で、病棟業務支援に当たります。

率先して赴かれる5名の看護師へ、国土理事長、杉山院長、佐藤看護部長より激励の言葉が送られました。



出発を見送る看護部幹部の皆さん

1月19日、能登半島地震におけるDMAT派遣要請により、NCGMはDMATを4名派遣しました

石川県・能登半島で1月1日に発生した最大震度7の地震に際して、DMAT派遣要請（第6次隊）により、NCGMはDMATを4名（医師、看護師、薬剤師、救急救命士）派遣しました。石川県庁にて、能登半島の各地域における避難所等の感染防止対策を指導します。

福島医師から活動への抱負が述べられ、国土理事長・杉山病院長からは率先して赴かれる4名の隊員へ、激励の言葉が送られました。



左から：菊地看護師、福島第三科救急医長、北原救急救命士、百武副薬剤部長



壮行会の集合写真

2月9日、能登半島地震における被災医療機関支援のためNCGMから看護師5名を派遣しました(第2陣)

1月1日に発災した能登半島地震により被災した医療機関における看護師派遣については、NCGMは5名の看護師を派遣しました。

今回の看護師派遣については、2月11日から派遣し、珠洲市総合病院にて病棟業務および外来業務を行います。

米廣師長から活動への抱負が述べられ、国土理事長・杉山病院長・佐藤看護部長からは率先して赴かれる5名の看護師へ、激励の言葉が送られました。



前列左から：中津川看護師、阿部看護師、米廣看護師長、長瀬副看護師長、飯干副看護師長

後列左から：木村副看護部長、高橋副看護部長、杉山病院長、国土理事長、込山理事長特任補佐、佐藤看護部長、中村副看護部長

2月5日、米国CDCとのワークショップが開催されました

米国疾病予防管理センター（CDC）からマンディ・コーエン所長、ケイト・ウォルフ主席補佐官ほか関連組織から約7名がNCGMを訪問し、ワークショップが開催されました。日本側からは、厚生労働省迫井医務技監ほか6名、NIIDから脇田所長ほか3名、NCGMからは国土理事長、武井企画戦略局長、大曲国際感染症センター長らが出席しました。



意見交換中の様子

本ワークショップは、米国CDC東アジア・太平洋地域事務所（EAP）オフィスの開設式典開催とコーエン米CDC所長の来日を機に、健康危機管理に関するワークショップが企画され、開催にいたりました。

今後、パンデミックからの教訓や情報収集等について、実務者レベルを中心とした意見交換の場を定期的に設定するため、協力連携について活発な話し合いが行われました。



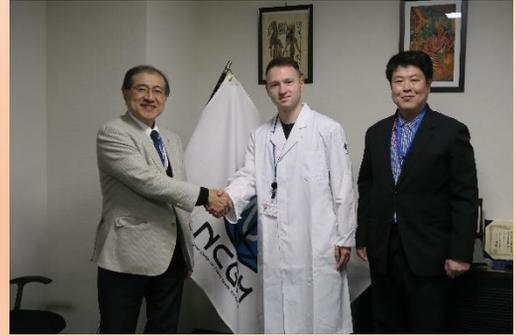
左から：NIID脇田所長、国土理事長、ミシェル・マコーネルCDC東アジア・太平洋地域事務所長、マンディ・コーエンCDC所長、迫井医務技監

1月10日、ウクライナからの研修生が国土理事長を表敬訪問しました

NCGMは、政府の医療協力の一つであるウクライナ医療者教育支援事業に協力しており、ウクライナからの研修生を受け入れています。2024年1月よりStepan Cherniaiev 医師がキーウから来日し、1月10日に国土理事長を表敬訪問しました。ウクライナで麻酔科・ICUに勤められているStepan Cherniaiev 医師は、3月までの約2か月間、救急科で研修を受ける予定です。祖国が大変な状況の中で、はるばる異国の地で励む25歳の研修医へ、国土理事長は激励の言葉を送られました。



懇談中の様子



左：国土理事長 右：牧野政策室長
中央：Stepan Cherniaiev 医師

山本匠形成外科診療科長がNHK総合テレビ『プロフェッショナル 仕事の流儀』で密着取材を受けました



NHK総合テレビ『プロフェッショナル 仕事の流儀』で、山本匠形成外科診療科長に密着取材したドキュメンタリー番組が1月31日に放送されました。山本科長はこれまで、損傷した体の一部を前例なき移植手術で次々とよみがえらせてこられました。

山本医師が得意とされている最先端のスーパーマイクロサージャリー（超微小外科手術）によって、治療の手だてがないと言われた多くの患者さんを救い、その技術を学ぼうと世界中の医師が山本医師の元を訪れています。スーパーマイクロサージャリーについて多くの方に知っていただく機会となったとともに、山本医師の素顔や本質にも迫った番組となりました。

小児科WEBサイト「オリジナルキャラクター『まーちゃん 病院へいく』」公開のお知らせ

(寄稿) センター病院 小児科

<内容>

当院小児科オリジナルのキャラクター「まーちゃん」が誕生しました。キャラクターデザインから絵本、グッズの製作など、女子美術大学の学生さんにご協力いただきました。

まーちゃんが小児科病棟へ入院してから退院するまでの物語が描かれた絵本「まーちゃん 病院へいく」は、子ども達の入院に対する心の準備や、医療経験の一つ一つが強みや自信につながって、前向きに次の医療処置へ向かえるような効果を期待しております。

まーちゃんの仲間たちが入院生活を安全に過ごせるように病院での安全について紹介する「安全BOOK」は、たくさん子ども達が手に取れるように、国際診療部の皆様にご協力いただき、7か国語で書かれています。

当院の小児科ホームページからアクセスできますので是非ご覧ください！



<URL>

小児科HPは[こちら](#)

またはQRコードからアクセスできます。

外来受付レイアウトを変更しました

2024年1月4日から外来受付のレイアウトが変更しました。

◆主な変更点

- ①病院の入口と出口(自動ドア)の配置が入れ替わりました
- ②会計と総合受付の配置が入れ替わりました。
- ③再来受付機、自動精算機の配置が変更になりました。
- ④エスカレーターの上りと下りが入れ替わりました。



センター病院診療科
シリーズ No.13

膠原病科



膠原病科メンバー

当科は内科系診療科の中でもリウマチ性疾患、膠原病を扱う診療科です。リウマチ膠原病疾患は多臓器にわたることが多く、訴えも多彩です。現在かかりつけの医療機関にてなかなか病気の原因がわからないと説明を受けましたら、一度は膠原病を疑い、当科を受診していただけたらと思います。この分野で最も多い疾患は関節リウマチですが、この20年大きく治療が進歩し、完治とはいかないまでも、寛解と呼ばれる状態にまで治すことが出来るようになりました。治療中、有害事象としての感染症、特に結核、B型肝炎再活性化、帯状疱疹など生じることがあります。膠原病には肺や腎臓の障害を持たれる方もおられます。必要に応じて院内の他の診療科とも連携して治療にあたります。今までステロイド、免疫抑制剤の治療であった全身性エリテマトーデスにも分子標的治療が行われるようになりました。必要に応じて考慮いたします。膠原病は慢性疾患で、ゆったりしていると思われがちですが、肺や腎の併存病態によっては緊急の治療を要します。研究所・難治性疾患研究部、国府台・肝炎免疫研究センター・免疫病理研究部、中央バイオバンクとも共同研究をしております。患者様におかれましては、このような研究へのご理解とご参加をお願いすると存じます。

教育面では、初期研修医含めた若手医師の育成も担っております。国立高度医療専門研究センターのなかでも成人の膠原病を取り扱っている施設は当院しかなく、その役目を果たせるよう、日々スタッフ全員で研鑽をしております。

(膠原病科診療科長 金子 礼志)

センター病院診療科 シリーズ No.14

放射線核医学科



当院はPET/CT 2台、SPECT/CT 2台を備え、核医学検査として悪性腫瘍、血管炎、心臓（虚血性心疾患、心サルコイドーシス）、脳（認知症、脳血流）、骨、甲状腺、腎臓、肺、副腎、唾液腺など多岐にわたる疾患に対応する核医学検査が可能です。また、 ^{131}I を用いた甲状腺疾患の治療（内分泌代謝科と共同）、 ^{223}Ra を用いた去勢抵抗性前立腺癌の骨転移の治療（泌尿器科と共同）、 ^{177}Lu を用いた神経内分泌腫瘍の治療（肝胆膵外科と共同）など、放射性薬剤を利用した内用療法を実施しております。国立国際医療研究センターにおいてこれらの多岐にわたる検査・治療を経験することで、数多くの核医学専門医が育成されました。

都内や関東近郊の施設との病診連携より、病診連携における検査や治療の依頼を数多く受けています。人間ドックにおけるPET検診、治験の主導や協力も行っております。

また、新たにアミロイドPET検査を開始いたしました。放射線核医学科HPの検査説明は好評をいただいております。引き続き、皆様に安心して信頼できる核医学検査・治療を提供できるよう努めて参ります。
※放射線核医学科のHPは「[こちら](#)」またはQRコードからアクセスできます。



(放射線核医学科診療科長 南本亮吾・堀田昌利)

研究所部門シリーズ No.18

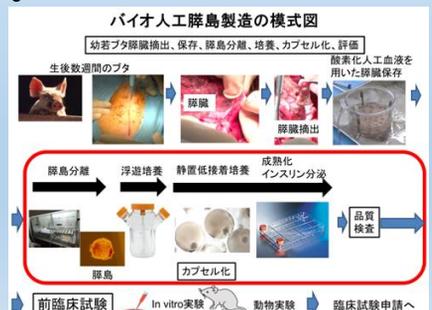
膵島移植企業連携プロジェクト

ブタ膵島を用いたバイオ人工膵島の移植による糖尿病治療を目指しています

インスリン産生細胞を補う「脳死・心停止ドナーからのヒト膵島同種移植」は、血糖コントロールの不安定な1型糖尿病に対する治療として令和2年度から保険診療となりました。光明ですが、ヒト膵島同種移植はドナー不足の課題があり、広く実施することができません。そこで、ヒトのドナーに頼らない、バイオ人工膵島移植の研究が進んでいます。特に特定病原体を排除した医療用ブタを用い、免疫隔離カプセルを用いた免疫抑制剤不要の「ブタ膵島異種移植」が期待されています。

当プロジェクトでは、日本で初めてとなる臨床試験を目指しています。「医療用ブタの確保」、「製造工程の確立」「非臨床試験による有効性・安全性の検証」等を行い、近い将来の臨床試験実施および最終的に企業とともに製品化を目指します。

(膵島移植企業連携プロジェクト長 霜田 雅之)



センター病院診療科 シリーズ No.15

当科では、貧血や多血症などの血球の減少や増加を伴う疾患から、造血器腫瘍に至るまで幅広く診療しています。入院診療では、主に急性白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、骨髄異形成症候群などを対象に、化学療法および造血幹細胞移植を行っています。さらに再生不良性貧血に対する免疫抑制療法なども行っています。悪性リンパ腫や多発性骨髄腫などでは、初回治療は入院で導入し重篤な合併症が無ければ、以後は外来にて化学療法を継続するのが一般的です。外来では、上記に加えて慢性骨髄性白血病や真性多血症、本態性血小板増多症などの治療を行っています。

血液疾患に対する治療法の開発は目覚ましく、特に分子標的療法や免疫細胞療法が画期的な成果を

血液内科

示し、当科でも積極的に取り入れています。また血液内科病棟全体を無菌室管理として、バイオロジカルクリーンルーム（写真）を4室設置し、安心して治療を行える環境を提供します。最近当科では移植経験が豊富なスタッフが増えてきて、適格例に対しては積極的に移植を施行しております。上記疾患に加えて移植適応になるような症例がございましたら、ご紹介いただければ幸いです。



バイオロジカルクリーンルーム

さらに上記のように、当科では幅広い血液疾患を対象に、最先端の治療を含めて経験できるため、研修を希望される方には恵まれた環境を提供可能です。

(血液内科診療科長 半下石 明)

研究所部門シリーズ No.19

ウイルス構造機能研究部

2022年9月に設立されたウイルス構造機能研究部は、HIVやB型肝炎ウイルスを含む感染症やその他の疾患の発症メカニズムの解明を目指しています。この研究部では、特にクライオ電子顕微鏡を用いた構造解析に重点を置いており、ウイルスや治療対象の分子の形状を明らかにすることで、感染症や疾患の発症メカニズムの解明を目指しています。この知見を基に、新しい治療法の開発を進め、医療分野への貢献を目指しています。

NCGMにおいて、クライオ電子顕微鏡による構造解析研究はまだ一般的ではありませんが、これは新たな研究の機会を提供します。構造解析が皆様の研究に新たな展開をもたらすことが期待されますので、興味のある方はぜひご連絡ください。

(ウイルス構造機能研究部長 町田 晋一)

写真：北海道大学ハイエンドクライオ電子顕微鏡の前に写真
(上：町田テニュアトラック部長 下：田中上級研究員)



センター病院診療科 シリーズ No.16

皮膚科

皮膚科全般に偏りなく診断と治療を行っており、取扱疾患は、湿疹／皮膚炎・蕁麻疹・乾癬・掌蹠膿疱症・ざ瘡・しゅさ・多汗症・脱毛症・白癬・带状疱疹・単純ヘルペス・蜂窩織炎・皮膚腫瘍など多様です。

各種皮膚感染症（带状疱疹・蜂窩織炎・ウイルス発疹症等）は随時入院受入可能です。

手術は母斑・粉瘤・脂肪腫などの良性腫瘍が主ですが、有棘細胞癌・基底細胞癌・悪性黒色腫などの悪性腫瘍や光線角化症などの癌前駆症も扱います。

機器としては、ダーモスコープ・クライオサージ・tcpO₂ モニタを備えています。Qスイッチルビーレーザー（写真）もあり、保険治療に加え保険外にも対応可能です。ナローバンドUVB・局所陰圧閉鎖処置(VAC)も可能です。

乾癬・掌蹠膿疱症・アトピー性皮膚炎・結節性痒疹・慢性蕁麻疹・円形脱毛症の生物学的製剤やJAK阻害薬による治療の学会承認施設として認定されています。

皮膚潰瘍・壊疽は切断を極力避け、QOLを考慮した治療を選択します。自己血小板を用いた「多血小板血漿処置」による治療は、先進医療の時代から行っています。また循環器・リハビリ・糖尿病等の関係各科との連携、特に循環器科による血管内治療が効果を上げています。褥瘡は短期入院によるポケット開放で管理が容易となります。

水疱症・重症薬疹・紅皮症等への入院対応も可能です。（皮膚科医長 玉木 毅）



研究所部門シリーズ No.20

生体恒常性プロジェクト

<血液をつくる幹細胞とニッチを精密に理解することで、再生医学や疾患生物学に貢献します！>

私たちの身体的全細胞の約三分の二は血液細胞です。生体恒常性プロジェクトでは、この膨大な数の血液細胞を継続的に作り出す、造血幹細胞に注目して研究を進めています。とりわけ、造血幹細胞が体内でどのように維持されて、疾患で幹細胞機能がどのように破綻するかについて、最新の技術を活用して解析しています。

これまでに、造血幹細胞の自己複製能や分化能を制御する分子機構や、造血幹細胞を支持する微小環境（ニッチ）を構成する細胞・因子を明らかにしてきました。近年では造血幹細胞やニッチの加齢変化（エイジング）に着目した検討を進めており、発がんとの関連も見出しています。今後は見出した知見をもとに、造血幹細胞を体外で自在に操作する技術の開発を進め、再生医療や疾患治療に役立つ技術を得ていく所存です。

（生体恒常性プロジェクト長 田久保 圭誉）



センター病院診療科
シリーズ No.17

エイズ治療・研究開発センター(ACC)

ACCは薬害エイズ訴訟の和解を踏まえたHIV診療の恒久対策として1997年4月に当院に設置されました。医師やコーディネーターナース、心理療法士やMSW、歯科衛生士など多職種チームによる包括的な診療を行っています。ACCには患者診療に加えて多くの役割が期待されています。豊富な症例(登録患者5380人)と臨床経験を元に、全国のHIV診療の均霑化のための研修の開催や、小冊子やHPを通じた最新情報の発信、治療法開発のための臨床研究、そして多くの国際臨床治験や共同研究にも参加しています。2011年には被害者救済のさらなる強化を目指して救済医療室を設立しました。国際貢献としてベトナム拠点をはじめアジア各国との共同研究を行っており、予防活動としてはHIV非感染MSMのためのSexual Health外来を開設して、他の性感染症も含めた新規感染者ゼロを目指した臨床研究を行っています。

このように、ACCの活動は多彩で多岐に渡ります。この機会に是非、当科のHPを覗いていただき、その全貌について良く知っていただければと願っています。

(ACC治療科長 照屋 勝治)



多職種で行われる
外来カンファレンスの様子

研究所部門シリーズ
No.21

ゲノム医科学プロジェクト(戸山)

<個の医療・ゲノム医療の基盤を担う>

私達は大規模な全ゲノム解析研究などによって我が国のゲノム医療を推進する基盤を担っています。すでにナショナルセンターバイオバンクネットワークに登録・保管された試料のうち約1万人分について全ゲノム解析(WGS)を行い、その結果を公的データベースから公開しました。また現在、難病患者・家族の全ゲノム解析も担当しており、これまでに約1.2万検体の解析を行い、患者還元および利活用のためのデータベースを構築しています。さらに、REBIND(感染症データバンク事業)におけるCOVID-19患者の全ゲノム解析も担当しています。

一方で、ナルコレプシー、B型肝炎、原発性胆汁性胆管炎、小児ネフローゼなどの国内最大規模の共同研究においてゲノム全域関連解析(GWAS)や全ゲノム解析(WGS)を担当し、また大規模な国際共同研究に参加することにより、多数の新規感受性遺伝子を見出すとともに発症機序の一端を明らかにしました。



(ゲノム医科学プロジェクト長 徳永 勝士)

センター病院診療科 シリーズ No.18

外来治療センター

(外来治療センター長 軒原 浩)

外来治療センターは、外来患者さんのがん薬物療法や膠原病等の生物学的製剤治療を適切かつ安全に行うために設置されています。外来化学療法室、処置室、診察室、相談室、薬剤室、多目的室を備え、複雑化する外来治療を集中的に行う部門です。複数の診療科、及び多職種が協働、連携しながら運営しています。



外来治療センターのメンバー

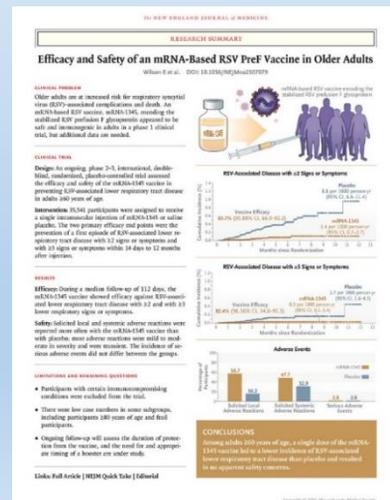
現在、診察室では消化器内科、乳腺腫瘍内科、呼吸器内科、緩和ケア科が診察を行っています。認定看護師をはじめ、経験豊富な看護師が、患者さんの外来での治療を安心、安全に行えるように適切なケアを提供しています。ここで使用する薬剤はセンター内部にある薬剤室の安全キャビネット専任の薬剤師により調剤され、患者さんに提供されます。相談室や面談室では、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、医師事務補助員、外来治療センタークラーク、ソーシャルワーカー等が連携をしながら、患者さんの支援や相談にあたっています。

是非、患者さんのために外来治療センターをご活用ください。また、センターの運営にご協力のほど、よろしくお願いいたします。

医学雑誌「NEJM」に氏家医長の論文が掲載されました

国際感染症センターの氏家医長が共著者として参加した「高齢者における mRNA ベースの RSV PreF ワクチンの有効性と安全性」研究が、医学雑誌「NEJM」に掲載されました。この研究報告では、RSウイルス関連下気道疾患の予防において、mRNA-1345 ワクチンが 83.7% の有効性を示したこと、安全性に重大な懸念は認めなかったことを報告しています。これらの知見は、新型コロナウイルス感染症の対策を契機に研究開発が進んだ mRNA ワクチンのプラットフォームを、別の呼吸器疾患である RSウイルス感染症にも応用し、公衆衛生対策上で重要となる高齢者のワクチンを開発するための重

要な節目となる結果です。22か国で 35,000 例以上を対象に実施された臨床試験は、NCGM トラベルクリニックでも、2022 年 10 月から実施されました。NCGM では、感染症対策の分野における研究開発を積極的に推進しています。



1月27日、中学生を対象に市民公開講座を開催しました

(寄稿) 外科 橋本 一樹 医師

中学生を対象とした市民公開講座を行いました。本講座では手術の体験学習を中心に、医療の現場を間近で学ぶ機会を提供しました。腹腔鏡手術の模擬体験や手術室の見学、さらにロボット手術システム「ダヴィンチ」の見学とデモ機による体験学習を行いました。また、救急科の小林医師による一次救命救急の実習も行いました。参加者には医療現場だけではなく、普段の生活において求められる一時救命救急の重要性や方法を学習してもらいました。

これらの体験を通じて、医療や外科治療に関する理解や興味が深まったのではないかと感じています。また、当院外科・救命救急センターのアピールが出来たのではないかと思います。

本講座の実施にあたり、多くの医師やスタッフの皆様のご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。



小林医師による一時救命救急講義



山田副院長、八木医師による講義



手術体験学習の様子



手術室見学・ダヴィンチ体験の様子

11月29日、NCGM専門認定看護師主催 新宿区看護師交流会を開催しました！

(寄稿)看護部 訪問看護認定看護師 松村幸子

新宿区内の看護職と交流を通して、地域包括ケアの強化を図る基礎作りを行うことを目的として、研修棟5階の大会議室にて開催しました。区内の訪問看護ステーション、地域包括支援センター、病院の看護師・保健師21名とNCGM看護師21名がグループに分かれ「身寄りのない患者の意思決定支援」についてディスカッションを行いました。

各グループとも積極的に意見が交わされ、地域とのつながりを作ることへの第一歩に繋がりました。

参加者からは「連携することで、患者さん利用者さんにとって途切れないサービスが提供でき、安心して地域で暮らしていけるのではないかと感じる」「在宅ではACP（『人生会議』）について積極的に取り組んでいる。病院との情報共有をどのようにしていくかが課題」「職場をこえて看護の話をする機会は、大変有意義だった」など多くの意見をいただきました。

地域住民が住み慣れた新宿で長く暮らせるよう、所属を超えて連携していきます。



発表中の様子



ディスカッション中の様子



清瀬の風

2月5日、「清瀬市立中央公園と国立看護大学校キャンパスの一体整理及び連携・協力に関する協定締結式」が行われました

(寄稿)国立看護大学 事務部長 川谷良秀

清瀬市立中央公園は、国立看護大学校に隣接する公園です。清瀬市は「図書館＋児童館」の複合施設建設を含めた公園全体のリニューアル計画を進めています。その際、公園と大学校キャンパスの境界にある柵を撤去し、一体的景観とするための工事も併せて行うこととしています。

協定書では、健康・文化・スポーツのイベントや、看護大学校の得意分野である医療・看護・健康などの機能を活用した地域住民の医療・健康向上のための取り組みなどについて、清瀬市と連携・協力していくことなどが記されています。

2月5日、澁谷清瀬市長・今村統括監経営政策部長他にNCGMにお越しいただき協定締結式が行われました。NCGMからは国土理事長、萱間看護大学校長、込山理事長特任補佐にご出席いただきました。澁谷市長、国土理事長に協定書へのご署名をいただき、今後の連携・協力についての確認が行われました。



ご出席者



国立看護大学校では、今回の協定書締結を契機として、本学の得意分野や、充実したキャンパス及び図書館、講堂などを地域住民に活用していただき、地域貢献のための役割をより積極的に果たしていきたいと考えています。

お写真 左から：萱間看護大学校長、澁谷清瀬市長、国土理事長

このだい
通信

第27回日本心療内科学会総会・学術大会を開催しました

(寄稿)国府台病院 心療内科 医師 河合啓介

2023年12月9日、10日に第27回日本心療内科学会総会・学術大会を東京国際交流館プラザ平成で開催しました。大会テーマは「未来へ繋ぐ心療内科の叡智」です。大会当日までの参加登録者数は約500名でした。

【講演内容】

鈴木 康裕 先生：心身の不定愁訴に医療制度がどう寄り添うのか

安宅 和人 先生：残すに値する未来を考える

Manfred E. Beutel 先生（ドイツ心身医学会会長）：

Cancer survivorship: Between lasting distress and posttraumatic growth: Psychosomatic perspectives



大会終了後の集合写真

国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.6

私は2018年1月から2023年12月までの6年間、世界保健機関（WHO）のガイドライン評価委員会外部委員を務めました。

WHOの最も重要な機能の一つが技術的な基準を設定することです。数ある技術的文書の中で厳しい基準を経たものだけをガイドラインと呼ぶことができます。

ガイドライン評価委員会では、WHO職員と外部委員がガイドライン計画段階と完成時に、基準を満たしているかの判断と改善のための指摘や提言を行っています。委員にはガイドライン作成方法の専門家のほか様々な専門性を持った人がいますが、共通点はエビデンスに基づくガイドラインを愛し、

信じていることです。たまに議論が白熱しますが、分厚いガイドラインを読んだ上で、効率的に議論を行うのを、毎月楽しみにしています。

一方、全世界に影響が及ぶ重責を感じながら毎月評価を行ってきました。



WHO本部：ガイドライン評価委員会外部委員
馬場 俊明（国際医療協力局 運営企画部/医師）

1月19日、ジブチ保健省次官がNCGMを訪問しました

ジブチ保健省から、Mr. Mohamed Ali Mohamed次官ほか1名がNCGMを訪問し、臨床工学科・中央検査部門・放射線診療部門の医療機材の運用管理を視察、ICUでの使用状況を紹介しました。日本の医療サービスの現場で使用されている医療機材の維持管理方法や、機材の運用状況について関心を持たれておりました。視察後は国土理事長を交え、今回の視察がジブチ国の医療水準の向上に繋がるよう、活発な意見交換が行われました。



国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.7

WHO本部：ワクチンのマーケットアクセス向上技術諮問委員

清水 栄一（国際医療協力局 連携協力部 / 上級研究員）

私は、2023年6月に、世界保健機関（WHO）より、ワクチンのマーケットアクセス向上技術諮問委員を拝命いたしました。

昨年11月の本誌では、技術諮問委員の役割についてお話ししました。

今稿では、私が諮問委員に採用されるまでの経緯を紹介します。

2022年12月15日、WHOのウェブサイトに採用募集が掲載され、締め切りは2023年2月12日でした。国際機関の人材採用プロセスとしては随分と余裕がある公募期間だと思います。しかし、私が提案を受けたのが2月1日。「応募してみないか」との誘いに、医師でも大学講師でもない私は懐疑的でした。時間が限られる中、カバーレターやCVを用意できたのは2月6日。協力局の先輩に助言を仰ぎ、大幅に洗練されたものが完成。締め切り直前に間に合いました。

その後、WHOからは何の返信もありませんでした。「世界中から何十人もの応募がある中で、私が受かるわけがない」と考え

ていました。ところが、5月15日に突然ジュネーブから国際電話が。「まだ興味があるか？ ショートリストに選ばれたので、写真とショートバイオを19日までに送ってくれ」とのこと。「それらをウェブサイトに掲載し、パブコメで2週間異論がなければ採用する」とのこと。半信半疑でしたが、驚くべきことに6月7日に採用通知が届いたので

す。「私でもいいのか？ 私に何ができるのか？」と戸惑いながらも、専門家会合を何とか無難にこなしつつ、未だにこの奇跡の意味を模索しています。

本稿が、規範セッターに応募される際の参考になれば幸いです。



WHO西太平洋地域事務所の
予防接種技術諮問委員会会合にて@マニラ

本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：
NCGM 広報企画室



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。